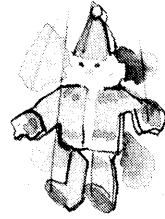


幼児教育から世界観へ



鼓 常 良

幼児教育がわが国でも問題になっているという。それは恐らく錯覚であろう。なぜならほんとうの幼児教育とは幼児そのものためのものである。そういうものはモンテッソーリ教育よりほかにはない。なぜならこの教育はまず幼児そのものを研究して、それによって教育のことをきめているからである。ところが普通おとなは幼児そのものなどを問題にしない。おとなの見る幼児が現実の幼児であつて幼児そのものなど別にあるはずがない。こういう意見になるのは、幼児は何も知らないし、何もわからないから、おとなが幼児に代わつて判断し、幼児のためにはすべてのことをしてやるよりほかはないという。

こういう考えは一応もつとものように聞える。しかしそれは「幼児のため」と思いながら、実際は幼児のこともすべておとなのために判断し決定している結果になっている。いうまでも

ないことだが、保育園は両親が共稼ぎするためである。いや両親が働けばそれだけ家計が豊かになり、子どももしあわせになるという。また両親が安心して働けるためには保育園で幼児のためを思って親切に世話しなければならぬというだろう。おとなでもそうだが、まして幼児は経済が豊かならしあわせだということのように簡単ではない。生活必需品の有無というようなことなら、そうかもしれないが、たいていのばあいはむしろ逆に裕福な家庭の子どもはかえつてふしあわせというばあいが少なくない。保育園では二歳以下のような、むしろ零歳のような幼児子どもこそ収容する意味があるという。しかし子ども自身からいうと、幼くともせいぜい二歳半までは家庭で親の手で育てるのが最もよいというのが科学的定説である。なぜならその年齢までぐらいに人間の生涯のことがきまつてしまうというぐらい

それは重要な時期で、親が十分の注意をもって育てねばならないというのである。

幼稚園では多くのばあい子ども中心にすべてのことができるのではなく、たいていは経営のつごうでできるのである。一人の教師が四十名ぐらいを受持たねばならないというのが現状である。(ヨーロッパではそれほどではない) そうすると教授法は一斉教育ということになる。もちろん一般的にいえば人間は孤独生活をするものでなく、社会を作って集団生活をするものである。しかしそう割切ってしまう。仕事にしても原案を孤独で立て、相談してきめる。集団生活といっても幼稚園のように同じ年齢の子どもばかり集めてみな同一のこととするというような不自然なことはない。それぞれちがった人がちがった分担をして組織されるのが社会生活である。唱歌にしても斉唱も合唱もある。

これらの現実生活にないような人工的な集団を作つてする一斉教育は、教育を受ける方の子どもを標準にして創設されたものでなく、授業する側のおとなすなわち教師が自分の便宜からできたもので、子どものためにできたものではない。

また一斉教育というのは、幼稚園などの幼児教育が創始したものでなく、小学校その他を見習つたものである。それを見ても授業のやり方すなわち教育の核心ともいふべきものを幼

児自身のために考案したのではなくて、幼稚園や保育園がすめばみな小学校へ行くのだから、小学校に見習うのが一番この目的(上級の学校へ移ること)にかなうのである。これによつて判断しても、幼稚園その他は幼児教育を目的としているのである。上級の学校に進むことを目的としているのである。こういう事実を見ても、外見上幼児教育にたずさわっているとしか見えない人たちが、幼児教育を目的としないで、上級の学校に行くことを目的として教育していることを見るならば、わたしが最初に言った「わが国で幼児教育が問題になつていふというの

は恐らく錯覚であろう」ということがわかるような気がする。

人間のすることはなぜこう見当違いなことになるのだろうか。いやいやこれが見当違いなどと考えるのが見当違いなのだ。幼稚園に行くのは小学校に進むため、小学校へ行くのは中学校へ行くため、中学校へ行くのは高等学校へ行くため、高等学校へ行くのは大学へ行くため、これが進学であり、これが進歩である。また大学まで行けば将来も発展できる。だから経済さえ許せばだれもかも大学へ行こうとするのだから、日本は世界でも進学率の一番高い国で、したがって日本は教育が一番進歩しているので、だから優秀な国の人びとが日本の教育を視察に来るのである。まったくそのとおりである。そしてこれが教育の目的なら、日本の教育はその目的にかなひ、何も改善

すべきこともない。そして日本国民は世界で一番しあわせな国民である。これを信じている人もたくさんある。

これは反省することなく、独断ですべてをきめ、勝手に定めた段階を登ることが進歩であるとし、その段階を登り切れば当然一番よい条件で社会に出ることになるから、それだけでも一番しあわせであると考えるのである。しかし反省のないところには進歩もないといえる。人間は自分のしていることをみな肯定すれば、けっきょく現状にとどまるよりほかはない。だから進歩というのは自分が勝手に作った段階を登るだけのことではなく、少しでもよい状況になることである。平たくいえば、いっそうしあわせになることである。

ここに「しあわせ」というだれにもわかり易い言葉が出て来たから、これを標準にして今まで述べた教育の現状を反省して見るというのも一つの方法である。なぜならば人間のする活動はみなこのしあわせを目的としないものはない。他のものを目的としているようなこともよく考えて見ると、何か他のものを目的としているように見えても、せんじ詰めればけっきょくみな「しあわせ」を目的としているようである。まして人間を対象とする教育がしあわせを目的としないということは考えられない。それでこれを標準とすれば見当違いということも避けられるのではあるまいか。しかし「しあわせ」ということは主観

的問題であるから、他人から押付けられることでなく、本人がそう感じることでなければならぬ。というところはわかり切った問題で今更言う必要もないと思うかもしれない。ところが世の中のことでこれがわかっていないと判断せらるることが、身辺いたるところにあるようである。しかし今は「教育」の話であるからそれにしぼって話を進めよう。

最初に「教育」とはいついたれのためのものであるか。これははなはだ簡単な質問のようであって必ずしもそうでない。だから条件を付けて答えておこう。第一それは生徒のためのものである。その他、直接には教師のためのものであり、間接には社会や国のためのものである。というのが多くの人が承認することであろう。しかし前に述べた教育の現状では生徒のためということを考えていないとはいわぬが、それは生徒がいいるものがそうだとしていただけで、それを判断し決定するのは教師か学校か文部省で生徒には直接関与させない。ところが「生徒のため」というのを「生徒のしあわせのため」と解し、しあわせは主観的なものだから、本人の判断にまねばならないといえ、とんでもないことをいうと思う人もかなりあるのではあるまいか。しかしその結果に児童、生徒、学生は自分のことをみな他人がきめて、それから生じる苦しみはみな自分が辛抱せねばならないことになる。具体的にいえば、教育内容は

上級の学校に行くためにきめられて、現在の自分に適當かどうかを第一にしてくれない。だから、無理でも興味がなくとも、ただ辛抱して勉強するよりほかはない。それで学校生活の主要なことはみな楽しくないことで、生活を楽しむためにはそれを怠るか、正科から離れたことクラブ活動を楽しんで多少いきまいるかであるが、そのむくいはすぐ先に待ち構えている。前に言ったように進学すなわち進歩で、だれもかも進学しようとし、その上におとなが優秀校をきめ、それを出たものがしあわせに迎えられると、おとながきめるので、生徒は学校を選ぶことは許されず、おとなのきめた優秀校を目差さねばならない。

こういう考え方で入学試験のために、不必要に難解な勉強を強制することになる。そして若い者の現在のしあわせを大部分犠牲にさせる。これは前に述べた教育の現状を「当人のため」

（「子どものため」）とか当人のしあわせなどの観点から觀察して見たところである。そしてこれは現今の教育せんたいの問題であつて、とくに幼児教育の問題ではない。それは幼児教育は自分自身よりも上級学校に向かつてすべてをきめるからである。今、教育の目的はしあわせであるということにすると、方向は逆転して上の学校は下の学校を見習わなければならないようなことになる。

幼児教育は幼児それ自身のためのものとか、幼児にしあわせ

なものであるとかいうと、おとなには幼児はわからないものがあり、しあわせが主観的なものであるとするとますますわからなくなると思うかもしれない。そう思う人は見込みのある人である。普通はおとなの判断をそのまま真実としてしまう。これがやっかいなのである。これを「おとなの先入見」という。これは真実に対して盲目にしてしまう。だからこれを全部することが先決問題である。そうすると案外子どもはわかりやすいものなのである。なぜなら子どもには作意がなく、いわゆる、「無心」である。だから虚心冷静に觀察するならば、子どもの真相は案外わかりやすいのである。その上にもう一つ大切なことは、子どもを未発達なおとなより劣つたものであるという考えをすてることである。これはわざとらしい態度を作れというのでなく、その反対である。なぜならおとなはたいいてい皮相に表面だけを見て深い真実を知らないものであるから、それを改めることなのである。なぜなら子どもは未発達であつておとなだけの能力がなく、おとなより劣つたものであるという。これも真相に合わない偏見なところがある。子どもはこれからおとなになるという意味で「未発達」なものであるが、おとなになることが全部プラスで進歩であるとはいえない。たとえば赤ん坊

ほど完全な呼吸をするものはおとなにはいない。そういう完全呼吸は自然から与えられたものをそのまま持っているからであ

る。それがおとなになるにつれて乱されてしまうのである。ヨガの賢者はこれをくわしく研究してそれをその行法に取り入れて健康を増し頭脳のはたらきをよくしているのである。これで見ると、発育ということが全部そのままよいこととはいえない。それはなぜかというと、人間は自然から与えられたものをそのまま大切にするだけで済んだのではなく、自然から与えられたものを加工して人間の文化を作った。それが人間の浅はかな考えから、自分のしあわせになると思ったのは、必ずしもそうではなくて禍のもとになったということが、近ごろことに表面に出て来て、「公害」という言葉まで出て来たのである。もし文化が自然の法則に沿って発展するならば、公害なんか起こらない。しかし今の自然科学文明は人間の欲望を充たすのが目的であって、そのために自然を利用するのに必要な程度に自然の法則に従うだけである。今の人間文化はこの人間の欲望なるものを高い広い立場から反省することなく、自然科学も外界の物質を人間のために利用することにばかり急であって、人間そのものを人間との関係をきわめることなどにはあまり関心をもたない。

幼児教育においても、幼児のなかにはおとなのなかよりは自然が純粹のかたちで作用している点が、おとなよりすぐれているわけで、そういう方面ではおとなの到底及ばない能力を見せ

るのである。たとえば創造力である。おとなが幼児について好んで創造力ということを用いるが、それはおとなの無理解から、廃物利用のようなことをそうだと誤解している。実はほんとうの創造力はおとなにはない。幼児にだけある。それは幼児のなかには自然が純粹に作用するからである。最もわかりやすい例は、母語を創造することである。新生児のなかには言語はないが、二歳にもなればある程度の言語ができる。無から有を作るのがほんとうの創造で、これはおとなにはできない。しかも幼児は意識して努力しない。この力によってわれわれの言語は維持される。これがなければ言語は存続しえない。文化も存続しない。言語は一例で、子どものすべての発育は自然の作用で子ども自身がしなければできない。身心の発育は教育であるから、子ども自身が自分を教育するよりほかはない。教師はその自然の法則に沿った軌道で、それを援助するだけである。それに必要な環境や教材は教師が整えねばならない。教師は自然ののっとった生活を学び、自分もしあわせに向上するのである。

(京都 幼児教育研究所)